

Title	心理学における内観内容の身分
Sub Title	The status of introspection in psychology
Author	中村, 麻里子(Nakamura, Mariko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.108 (2002. 2) ,p.45- 66
JaLC DOI	
Abstract	<p>Introspection has been used to study mental states or consciousness. In psychology, the method of introspection was criticized by behaviorists because the method of introspection was subjective and so not reliable, though introspection is used in some psychological experiments even today. What we should be careful here is the target of the criticism; whether introspection or the content of introspection is subjective. Here we are talking of only the introspection of perceptive content. The content of introspection has been thought as something like a mental image, which is inevitably subjective. According to internalism, introspection is the internal process, so the content of introspection is also internal and subjective. Dretske suggests that the content of introspection be objective. When we are aware of experience having some properties, we are aware of something objective having these properties. We aren't aware of something subjective when we introspect our perception. This idea can make the content of introspection objective, and reliable in psychological researches. However, such idea doesn't perfectly exclude subjectivity from introspection. Introspection has the subjective property in that it is always experienced by one person. But the content of introspection itself, different from the introspective event, is objective. For we are aware of facts when we introspect.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000108-0045">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000108-0045</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

# 心理学における内観内容の身分

— 中 村 麻 里 子\* —

## The Status of Introspection in Psychology

*Mariko Nakamura*

Introspection has been used to study mental states or consciousness. In psychology, the method of introspection was criticized by behaviorists because the method of introspection was subjective and so not reliable, though introspection is used in some psychological experiments even today. What we should be careful here is the target of the criticism; whether introspection or the content of introspection is subjective. Here we are talking of only the introspection of perceptive content.

The content of introspection has been thought as something like a mental image, which is inevitably subjective. According to internalism, introspection is the internal process, so the content of introspection is also internal and subjective. Dretske suggests that the content of introspection be objective. When we are aware of experience having some properties, we are aware of something objective having these properties. We aren't aware of something subjective when we introspect our perception. This idea can make the content of introspection objective, and reliable in psychological researches.

However, such idea doesn't perfectly exclude subjectivity from introspection. Introspection has the subjective property in that it is always experienced by one person. But the content of introspection itself, different from the introspective event, is objective. For we are aware of facts when we introspect.

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

E-mail: mariko@phil.flet.keio.ac.jp

## 1 序

内観は古来、意識現象を探究する方法として中心的な位置を占めており、初期の心理学においても中心的方法として採用されていた。だがその方法は行動主義の批判にさらされ、それ以後現在まで、心理学における主な方法としては採用されていない。

だが、内観が実験の中に含まれなくなったわけではない。心理学の実験の中には、内観報告をデータとして使用しなければ実験として成立しないものが少なからずあると思われる。被験者に「刺激がどのように見えるか」「刺激を感じるか感じないか」を確かめ、与えられた刺激との関係を作るには、被験者の内観報告に頼るしかないからである。

ところで、内観報告は心理学だけでなく、日常のあらゆる場面で使われている。我々は、自分の考えや身体の状態などに気づきながら生活を送っている。自分が今何を考えているのか、体がどんな風に痛むのかなどについて、我々は注意を向けることができる。

例えば、ときに我々は自分が何かを見ていることに気づく。美しい紅葉にしばらく見とれ、ふとした拍子にそのことに気づいて「きれいな紅葉には眼が行くなあ」と思うとき、我々は、自分がその紅葉を見ていることを内観している。これは、自分の視覚状態に気づいている状態である。次に、私は美しい紅葉を見ていることを友人に伝えたくなり、友人にその場で携帯電話をかける。そして「今美しい紅葉を見ているところ」と報告する。このとき私が友人に伝えているのは、自分の内観内容である。「紅葉を見ている」と誰かに伝えることには、自分が紅葉を見ていることに気づいていることが常に伴う。そのため、第三者に自分の視覚状態を伝える場合、その内容は内観された内容となる。

また、医者が患者の訴えを聞く場面を考えてみよう。患者は自分の身体に起こっている異変を、自ら観察しながら医者に報告する。自らの身体の

状態について内観を行うのである。医者はその内観報告をもとに、患者の身体に関して判断を下す。このような場面では、内観報告が重要な役割を果たしている。

さて、こうして生活の場でも大きな役割を果たしている内観は、心理学においても少なからず活用されているが、果たして科学的に信頼できる方法なのだろうか。現代の心理学においては、実験に条件をつけることで内観内容の信頼性を高めてきた。内観を外側からコントロールする他に、内観内容の身分を明らかにすることによって、内観内容を心理学におけるデータとして保証することを考えてみたい。

そのために、初期の内観心理学の主張と行動主義の批判を見た後、哲学の側から内観とはどのようなものなのかを検討し、内観内容の身分を心理学のデータとして適切なものであると考える助けにしたい。

## 2 初期の心理学における内観と行動主義による批判

### 2-1 初期の心理学における内観

#### 2-1-1 ヴントの心理学

ヴントは内的感覚 (Wahrnehmung: inner perception) と内的観察 (Beobachtung: inner observation, 内観) とを区別した。内的感覚とは心的状態のことである。内的観察とは、内的感覚に注意を向け、自らの心的状態を意識すること、あるいは心的状態にいわば「気づく」ことである。さて、そのように観察された内的感覚 (= 気づかれた内的感覚) は、もはや以前の内的感覚ではない。なぜならヴントは、内的感覚は内的であるゆえに、観察されることによって変容を被る性質を持つと考えていたからである。ヴントは内的観察よりも、内的感覚を心理学の主題として取り上げようとしたが、上に挙げたような性質により、内的感覚はそのままでは心理学の対象にすることができない。そこでヴントは、実験の方法に以下のような条件をつけて内的感覚を探ろうとした。つまり、内的感覚の受

動的過程によって気づかれるような単純な色つきの図形や対象を被験者に提示すること、被験者の内的感覚とそれについての内観報告との間の時間をできる限り無くすこと（ボタン押しによる反応も用いられた）、内観報告のデータは経験を積んだ被験者から取ること、被験者への質問は大きさ、強度、持続性に限ること、などである。つまりヴントの要求した内観報告は被験者の勝手な経験報告ではなく、精密さを目指して統制されたデータと言えるものであった。そしてこれらの配慮によって、実験を通してできる限り内的感覚に迫ることができると考えた。

ヴントにとって内観を心理学の方法として信頼できるものにしていただのは、実験に様々な条件をつけること、特に、被験者に経験を積ませ、反応をできるだけ機械的にしたことである。ヴントが実験に条件を加えることによって目指したのは、内的感覚と、それへの気づきである内的観察（内観）との対応関係の正確さを保証することである。なぜならヴントは、前述した通り、内的感覚をいかに正確に記述するかが心理学の仕事であると考えていたからである。

内観の対象が内的感覚である限り、内的感覚が心の中に誰にも見えない形で主観的なものとして最初から指定されていることは、後に行動主義による批判を招く考え方である。ヴントの後に続いて同じく内観法を使用したティチェナーやヴェルツブルグ学派による内観法の取り扱いは、心の内側にあるものをいかにそのまま報告するかというヴントの試みからは大きく逸れた方向へ向かい、行動主義の批判を招くことになった<sup>1</sup>。

## 2-1-2 ティチェナーの心理学

アメリカに渡ったヴントの高弟、ティチェナーは、心を「感覚要素」の

<sup>1</sup> 内観法を使用し、行動主義によって批判されたのは、ヴントやティチェナーやヴェルツブルグ学派だけではないが、初期の心理学における内観法の持つ難点をよく表すものとして、ヴントだけでなくさらにその2つの立場を取りあげることにする。

集合と考え、感覚経験を注意深く観察することで、経験を構成する要素すべてを見出すことができると考えていた。そのためティチェナーの場合、内観法によって知られることを知覚経験に限ったヴントと異なり、思考や感情、意志などの心の働きを分析するのにも内観法を使用した。

ティチェナーは内観法を用いるにあたって、内観報告をする際に感覚内容に関する解釈や推論を行うことを禁止したり、被験者に「刺激錯誤<sup>2</sup>」を犯さぬよう求めたりするなどして、なるべく純粋な感覚内容の報告が得られるよう、実験の統制を行った。しかし彼は、ヴントのように経験内容を即座に報告するのではなく、経験を後から振り返って分析し、詳細に報告することを要求したため、結局のところ内観報告は推理を含む回想報告と化してしまい、現時点で進行している経験内容をなるべくそのままの姿で伝えようとする報告とはならなかった。

ティチェナーの用いた内観法の本来の意図は感覚内容の報告にあったが、その方法は結果として、内観する対象を記憶内容にまで拡大しており、それに関する統制は行われていなかった。このように内観の対象が統制されない形で拡大されることは、次に挙げるヴェルツブルグ学派においても続き、そのことが初期の心理学における内観法の持つ難点をさらに明確にすることになる。

### 2-1-3 ヴェルツブルグ学派

ヴェルツブルグ学派は、特に思考の働きを内観法による研究対象とした。その方法はティチェナーよりもさらに統制のされないものであり、むしろそれが思考のありのままの姿を描き出すと考えられた。実験において、被験者は高次の思考の働きを要求されるような複雑な課題を与えら

<sup>2</sup> 吉村 (1998) によると刺激錯誤とは「直接経験したものを記述する代わりに、その刺激について知っていることを記述する誤り」である。吉村 (1998), 29 頁参照。

れ、その課題に反応するだけでなく、反応した際の思考の流れを自由に報告するよう求められた。

その実験の結果、思考過程は、「心像 (image)」と「意志活動と結びついた感情」の2つのほかに、第3の思考過程である「心像のない思考 (imageless thought)」が存在することが報告された。報告では「被験者は、はっきりした心像とも、意志活動とも言えない、ある種の意識過程を経験したと言った」という。それは「なんとも言えない意識過程」などと呼ばれ、「心像のない思考」をどのように考えるかをめぐって論争をまきおこした。論争のうちに、ヴェルツブルグ学派は「心像のない思考」を「思考」そのものであると考えるようになり、最終的には、思考自体は実際には無意識的な過程であるとみなし、「心像のない思考」を思考そのものではなく、思考の存在を示す意識的指標と解釈した。

ヴントはその結論を、ヴェルツブルグ学派の実験は適切な実験的統制が行われていないこと、被験者にとって、与えられた課題を考えると同時に、その過程を観察することは困難な作業であることなどをもって批判し、「心像のない思考」は不十分な実験から帰結した想像の産物であると主張した。また、ティチェナーは、「心像のない思考」は内観者が心的内容の分析を放棄した結果であり、ヴェルツブルグ派における内観者は内観作業に失敗したと述べた。

ヴントやティチェナーは内観を用いる心理学の立場を守るためにヴェルツブルグ学派の批判を行ったが、こうした論争をきっかけに、内観法の方法としてのもっともらしさが疑問視されていった。

ヴェルツブルグ学派が内観の対象を思考内容やその過程にまで拡大した結果、彼らは「心像のない思考」という対象を心の中に「発見」し、論争を招いた。結局のところその論争の根本的な原因は、内観法における内観の対象が原則として個々人の経験内容にあったことに求められるのではないだろうか。内観の対象が個々人の経験内容であったために、統制の難し

い思考過程や複雑な心的状態にまで内観の対象が拡大され、実験データが被験者の自由な報告を含む恣意的なものであることは避けられない状況に陥った。

## 2-2 行動主義による内観批判と内観心理学

ヴントやティッチェナー、ヴェルツブルグ学派に共通するのは、内観の対象を心的状態や思考過程など、いわば「心の内側」に据えていたことである。行動主義は、内観によって観察されるものが他人に観察できない主観的な性質を持つ限り、内観報告の科学化は不可能であると考えた。そして、内観の対象である意識経験そのものや、意識内容を観察することを方法として持つ内観心理学を否定した。

内観報告自体は、適切に統制されることによって、現代の心理学においても多く用いられている。だが、内観内容の身分に関しては反省が十分なされないままであるように思われる。

そこで、我々の経験にある種の主観的側面が伴うことを認めつつ、個々人の経験内容に関する内観報告が心理学のデータとして用いるのに足る身分であることを主張できないものだろうか。そこで次章では、内観するとはどのようなことかを哲学における議論から検討する。

## 3 哲学における内観の検討

そもそも、心にとって内観するとはどのような作業なのだろうか。内観とは何か、内観内容とは何かを以下に検討する。なお、本論では知覚経験に関する内観に限って話を進める。

### 3-1 内観に関する高階の表象説

内観は意識の一部である。例えばデカルトやロック、カントは、意識とは、自分の心理状態を自ら知覚的に表象することであると考えた。つま

り、自分の心的状態についての表象、すなわち二階の表象を持つことが、その心的状態を表象していること、つまり心的状態を意識していることである、という考え方である。この考えによれば、自らの心的状態を表象することが、内観することであることになる。現在、このような考えの流れを引く立場は、一般に高階の表象説と呼ばれている。

高階の表象説は、ある主体にとってある経験がどのようなものであるのかを説明したり、個体の心的状態にとって主観的とはどのようなことかを説明したりするには高階の表象が必要だと主張する。カルーサーによると、高階の表象説は、高階の状態を経験とみなす説と思考であるとみなす説に分かれているが<sup>3</sup>、ここでは高階の状態を思考とみなすローゼンタールの説を、高階の表象説の例として簡単に紹介したい<sup>4</sup>。

ローゼンタールにとって心的状態は、適切な二階の思考に伴われるとき、意識的になる。そのため、すべての心的状態が意識的状态というわけではない。そして二階の思考は、その二階の思考を持った三階の思考を持つときにのみ意識される。

彼にとって、心的状態が意識的であることと、その状態に内観的に気づくことは区別しなければならない。心的状態が意識的であるのは、それが意識の流れのなかに生じているということである。それに対し、内観は、意識の流れのなかに生じた心的状態に意識的に注意を払うことである。従って、内観によって特定の心的状態に気づくことは、その心的状態にあるという思考を持ち、かつ、その思考を持った思考を持っているということである。そのためローゼンタールにとって、三階の思考を持つことが、内観していることである<sup>5</sup>。

例えば、赤いりんごを見ている経験を内観するとする。ローゼンタール

<sup>3</sup> Carruthers (1998), (2000) を参照。

<sup>4</sup> Rosenthal (1986) を参照。

<sup>5</sup> 内観が二階の状態なのか三階の状態なのかは高階の表象論者の間で意見が分かれる。

によれば、心的状態は以下の段階を踏んで内観される。

一階の心的状態：単なる覚醒状態。赤いりんごが視野の一部として視界に入っている状態。

二階の思考：一階の心的状態に意識的であること。心的内容における赤いりんごに気づいている状態。

三階の思考：二階の思考に意識的であること。「赤いりんごを見ている」と思う状態。

高階の表象説は、内観の対象はあくまで何らかの心的状態であると考えている点がポイントである。ただし、現代の高階の表象説においては、表象内容自体は客観的对象を指しており、ロックやカントと違って、外界の対象をイメージのようなものとしてとらえることはしていない<sup>6</sup>。

いずれにせよ、高階の表象説は、我々が日常的に持っている「内観」の印象とうまく合っているように思われる。内観とは言葉どおり「内部を見る」ことであり、ここで言われている「心的状態(内容)を見る」と呼べるような行為であると考えるのは、ごく自然である。この自然さは、ロックやカントの伝統が今でも我々の生活に生きていることの証しかもしれない。

このような内観の伝統的な見解に対しては、疑問がすぐに浮かんでくる。例えばそれは、我々が内観するということで行っているのが、実際の

<sup>6</sup> この点で、現代の高階の表象説は、ロックやカントによる、伝統的内在主義を併せもったタイプの高階の表象説とは区別される。ロックやカントの伝統的考えは、内観を高階の意識状態とし、表象はイメージのようなものだと考えている。そして、表象内容を認識作用の結果として捕らえた点で内在主義的であると言える。一方、現代における表象の高階説論者は、内観を高階の意識状態とし、内観の対象が表象であると考えが、その表象内容は客観的な外の対象を指すと考えている。つまり、表象内容に関しては外在主義的と言える。ちなみに次節から紹介するドレツキは、高階の表象説が一般に持つ特徴である「内観の対象は主観的な表象である」点に反対し、かつ、伝統的な内在主義の持つ特徴である「表象が生成する過程に注目すること」とは異なった説を展開している。

ところそのような行為なのかどうかという疑問である。

また、高階の表象説による内観の考え方は、心理学における内観の信頼性を高めるものでは到底無さそうである。なぜなら、内観（高階の表象作用）の対象が個々人の心的内容なり経験そのものなりである限り、内観内容が内在的で、個人間の実証的比較が困難であるため、内観内容は心理学のデータとして不十分であるという既に提出済みの批判を避けられないからである。

以上に挙げたような、内観の本質に関わる疑問や、高階の表象説に投げかけられた種類の批判を回避できるかもしれない説を、次に詳しく探っていきたい。

### 3-2 ドレッツキによる表象主義

#### 3-2-1 置き換えられた知覚とメタ表象<sup>7</sup>

ドレッツキの立場は、前節の高階の表象説と対応させると、一階の表象説と呼べるようなものである。ドレッツキのポイントは「内観は『内側を見ること』における過程ではない」というものであり、いわば「内側」にある経験内容に関する高階の表象が内観内容であるという前節の説とは明確に対立している。

ドレッツキは置き換えられた知覚 (displaced perception) という知覚の形式があると指摘した。例えば我々は、乗った体重計の目盛りが100キロを指しているのを知覚することで、自分の体重が100キロであることを知る。ここで重要なのは、知る内容は自分の体重だが、そのために直接知覚するのは自分の体の重さ（が100キロ分あること）ではなく、（それ自体は重さを持たない）体重計の目盛りであるということである。これをより一般的に書き換えると以下のようなになる：

---

<sup>7</sup> Dretske (1995) を参照。

k そのものではなく、hを知覚することによって、kがFであると知る

体重計の例に当てはめれば、k=体重 h=体重計の目盛り F=100 キロとなる。この場合、k（体重）がh（体重計の目盛り）によって置き換えられている。

ドレッキによると、知覚の表象理論において、内観的知識は「置き換えられた知覚」の形式を持っている。つまり、経験内容が知覚対象によって置き換えられるのである。我々は知覚経験そのものを直接意識するのではなく、外の対象を知覚し、それを置き換えることで、内観を得ていることになる。

ドレッキは内観の説明のために、さらにメタ表象という考えを導入する。内観的知識は表象的事実の知識である。そのため、内観的知識は表象の概念的表象である。その意味で、内観的知識はメタ表象である。言い換えると、メタ表象とは、何かを表象しているものとして表象することである。

例えば、太郎の写っている写真があるとしよう。私は、その写真（紙切れ）が太郎を表象するものとして、その写真を表象している。この場合、私は「太郎の写真」というメタ表象を持っている。これをさきほどの「置き換えられた知覚」の形式に「太郎の写真」を当てはめてみるならば、「（実際の）太郎」が知覚されるのではなく、「写真に写った人物」に置き換えられて知覚され、太郎が写真に写っていると我々に知られる、ということになる。

さて、しかし、その写真を2gの紙切れとして記述するなら、それは紙切れという表象を表象することである。だが、2gの紙切れとして表象することは、その写真自身が何かを表象しているものとして表象することではない。そのため、写真を2gの紙切れとして表象することはメタ表象

ではない。メタ表象は「表象の表象」という意味ではないことに注意しなければならない<sup>8</sup>。

我々の日常生活にはメタ表象が頻繁に登場する。散発的に屋根を叩く音がし始めると、我々はその音を雨が降ってきたことを表象するものとして表象する。あるいは、フライパンから漂う強い匂いを、我々はフライパンの中身が焦げていることを表象するものとして表象する。

さらにまた、メタ表象は、何らかの思考や経験として、あるものを表象することもある。そしてそのあるものが思考や経験である場合、我々は内観を行っていることになる。

例えば、青に関する知覚経験を内観する場合を考えてみよう。青に関する感覚表象の経験に関する内観的知識は、その経験を、青に関する経験（青を表象する経験）として、概念的に（メタに）表象することである。

このメタ表象という考えを使って内観を見直してみると、知覚表象の内観とはメタ表象を持つことである。

### 3-2-2 3つの気づき (awareness) の区別を用いた内観の特徴づけ

ドレッキは、置き換えられた知覚の改訂版と呼べるような論文を提出している<sup>9</sup>。

以後の記法を述べておく。o を object（あるいは出来事、条件、状態など）、p を object の性質 (property)、f を「o が p である」という文で表せる事実 (fact) であるとする。o, p, f は、どれも客観的な対象である。

さて、ここでは「何かに気づくこと；気づき (awareness)」は、経験的事実として前提になっている。o, p, f への気づき（o, p, f それぞれを知覚すること）は、“f-awareness”, “o-awareness”, “p-awareness” の3種類

<sup>8</sup> ドレッキの説は「メタ」という高階を連想させる言葉を使っているが、前節で紹介した高階の表象説における高階の意味とはこの点で異なっている。

<sup>9</sup> Dretske (1999) を参照。この論文ではメタ表象という考えは使われていない。

に分けられ、それぞれ概念的に独立している<sup>10</sup>。例えば目の前に青いネクタイがあるとしよう。そのとき、「それが青い」ことに気づくのは“f-awareness”（oがpであるという事実への気づき）であり、「ネクタイ」に気づくのは“o-awareness”（oへの気づき）、「青さ」に気づくのは“p-awareness”（pへの気づき）である。それぞれの「気づき (awareness)」は独立しており、光の具合によっては、「青さ」に気づかずに（p-awareness せずに）「ネクタイ」に気づく（o-awareness）場合もある。また、oやpに気づくことなく、fに気づくこともある。例えば「このネクタイは青い」という事実気づくには、ネクタイ（o）に直接気づいたり、青さ（p）に直接気づいたりしなくても、そのネクタイのパッケージのラベルによって気づくことができる。

日常生活における私たちの経験はこれらの気づきが混合している。例えば、前の例とは異なり、ネクタイを直接目にして「彼のネクタイが青い」という事実気づく（f-awareness）ことは、すなわち彼のネクタイに気づき（o-awareness）、かつ、その色に気づくこと（p-awareness）である。

また、なかには事実に含まれているのとは異なる object や property に気づくことで f-aware する例もある（その場合、f-awareness は間接的である）。例えば、鉄が熱いという事実を f-aware するとき、普通は鉄に実際に触ってその熱さを p-aware するのではない。我々はその鉄の色の変化を p-aware することで、鉄が熱いという事実を f-aware する。この間接的な気づきは、置き換えられた知覚の改訂版であると言えよう。

このように、ドレッキによれば、「気づき」という経験の内容は気づく対象であり、心から独立した客観的な対象である。

さて、これらの区別を踏まえたうえで、経験や経験内容に関して考えを進める。

<sup>10</sup> 因果的には関連することもあるとドレッキは述べている。

まず、Eを経験、PをEの性質であるとする<sup>11</sup>。経験のなかには、さきほど挙げた“f-awareness”, “o-awareness”, “p-awareness”が含まれる<sup>12</sup>。そして、経験や経験の質に関する場合でも、物や物の性質に気づく場合と同様に「Eに気づくこと (o-awareness of E), Pに気づくこと (p-awareness of P), EがPであるという事実気づくこと (f-awareness of 'E is P')」という区別を設けることができる。これらの気づきはそれぞれ異なる内容を持ち、独立している。

では、これらの区別を使うと、内観するとはどのようなことだろうか。ドレッキの考えを順に追って整理すると以下のようなになる。

- (1) 内観は、「『oはpである』ことに気づく」ことがどのようなことであるかに気づく、という形式であり、f-awarenessを内に含んでいるのが特徴である。
- (2) 知覚経験に関する内観内容では、「『oはpである』ことに気づく」というf-awarenessをE（経験）に置き換えることができる。
- (3) すると内観は、Eがどのような性質(P)を持っているか('E is P')に気づくこと、つまり「『EはPである』ことに気づく (f-awareness)」ことである。
- (4) だが、'E is P' と、E そのもの、P そのものは互いに異っており、個別のEやPに気づいたとしても、'E is P' に気づいていないこともありうる。では、「『EはPである』ことに気づく (=内観する)」とはどのようなことだろうか。
- (5) 'E is P' は、直接には気づかれず、(実質的に経験Eの内容であるところの) f-awareness (of 'o is p') を持つことによって気づかれ

<sup>11</sup> Pは「経験(E)の性質」であるという表現になっているが、ドレッキの意図する「経験の性質」は「その経験がどのような内容を持っているか」ということであり、経験そのものの質を指しているわけではない。

<sup>12</sup> 経験の中には気づかれない (aware されない) ものもある。

ている。つまり、'o is p' に気づくことが、'E is P' に気づくことである。

- (6) 従って、『o は p である』ことに気づく」ことがどのようなことかに気づく（＝知覚経験を内観する；'E is P' に気づく）のは、「o は p である」ことに気づく（＝'o is p' に気づく）ことである。

では例えば、『りんごが赤い』という知覚経験がどのようなものに気づく（＝知覚経験を内観する）」とは、どのようなことだろうか。上の議論に従えば、『りんごが赤い』という知覚経験がどのようなものに気づく（＝知覚経験を内観する；'E is P' に気づく）のは、「りんごが赤い」ことに気づく（＝'o is p' に気づく）ことである。そして、「りんごが赤い」ということは事実であり、個々の「りんご」や「赤い」ということもまた客観的な事象である。そのため、我々の内観内容、すなわち知覚経験の性質 P は、外的な対象の質である。

ちなみに、私たちは知覚経験の性質 P にまるで直接気づいているように見えるが、これは、外的対象の質 p があまりに直接的に与えられるからであるとドレッキは説明する。

要約すると、ドレッキによれば、内観することとはある知覚経験が性質 P を持つこと（'E is P'）であるが、E が P であることの f-awareness は、外的対象の性質 p に気づくこと（p-awareness）によって得られる。内観行為をこのように考えることで、自分の知覚経験の性質がどのようなものであるかを内観することは、知覚の外的対象の質に気づくことであると考えることができる。

### 3-2-3 表象内容の外在説と内在主義的な高階説の比較

ドレッキのような表象内容の外在説と、内在主義的な高階の表象説（伝統的内在説）が取る考えの違いをより明確に表すために、以下のような記

法で整理しなおしてみよう。o, p, f に関しては 3-2-2 と同様であるが、‘awareness of’ (～に気づく) を表すものとして、新たに ‘□’ を導入する。すると、“f-awareness”, “o-awareness”, “p-awareness” はそれぞれ、□f, □o, □p と書きかえることができる。

さて、表象内容の外在説と伝統的な内在説は、この記法に従えば、以下のようになる。

外在説:  $\square f (E \text{ is } P) \rightarrow \square f (o \text{ is } p)$

内在説:  $\square f (E \text{ is } P) \rightarrow \square o (E) \ \& \ \square p (P)$

(左辺と右辺を結ぶ矢印は、左辺の項から右辺の項が生成されることを示す)

外在説の式は 3-2-2 で説明したとおりである。内観すること ( $\square f (E \text{ is } P)$ ) は o が p であることに気づくことである。そのため内観の対象は o が p であるという事実であり、それは客観的な対象である。

伝統的内在説における内観は知覚と類比的であり、ネクタイの o-awareness と 青さの p-awareness からネクタイが青いことの f-awareness が生成されるのと同じように、E の o-awareness と P の p-awareness から E が P であることの f-awareness が生成される。これによると内観によって気づく対象は個別的な経験そのものや経験の質そのものであり、それらは客観的な対象とは言えない。

### 3-3 色に関する外在説と内在説

3-2-2 で紹介した p-awareness (対象の性質に気づくこと) の具体例を挙げるとすれば、ひとつに、何らかの色に気づくということがある。我々はりんごの色が赤く見えるだけでなく、そのりんごが自分には赤く見えていることに気づく (内観する) こともできる。ドレッキによれば、この赤さという性質は客観的な対象であり、内側で作られたイメージや表象ではない。色の心理学的・生理的研究においては、色は主観的な経験の対

象であり、客観的な存在物ではないという意見が多くを占めている。その考え方に従うと、内観の対象としての色は、ドレッキの主張するような客観的对象ではなく、主観的な経験内容にのみ現れるものであることになってしまう。

ドレッキのような立場と、心理学や生理学で想定されている立場という、これらの2つの立場の違いは、先に挙げた表象内容の外在説と伝統的な内在説の違いに比べられる。ここではピーターとタイの論文<sup>13</sup>を参考にしながら、色に関する2つの立場の違いを見ることにする。

### 3-3-1 色に関する内在説

まず、色を心の内側の働きによって説明するという意味で伝統的な内在説に立った現代の見方として、ハーディンによる対立処理モデル (model of opponent processing)<sup>14</sup> を非常に単純化した形で紹介する。

ハーディンは、さまざまな色の経験を、光の波長ごとに反応が異なる、脳内にある赤-緑色経験のためのチャンネルにおけるニューロンの活動と、黄-青色経験のためのチャンネルにおけるニューロンの活動の組み合わせによって起こるものであるとした。この立場では脳内におけるある種のニューロンの活動が色経験を生みだしており、色は対象の性質ではなく、いわば脳内の活動の性質であることになる。従って、この説の場合に色経験を内観する際、その対象になる色は脳内に存在することになる。この説は我々の視覚が成立する過程をうまく説明している。

だが、内観内容における具体的な経験の対象に関して、この説は適切な説明を与えられていないように思われる。例えば、赤と黄色の混色であるオレンジ色のものを知覚するときは、赤経験を生み出す神経細胞の活動と、黄色経験を生み出す神経細胞の活動が組みあわさることで、我々はオ

<sup>13</sup> Peter and Tye (2001) を参照。

<sup>14</sup> Hardin (1997) を参照。

レンジ色に気づく。そのことを、3-2-3 で使用した記法を使うと以下のようになる。

(式) □ (オレンジ色経験  $E_o$ ) → (□ (赤経験  $E_r$  を生成する神経活動)  
& □ (黄色経験  $E_y$  を生成する神経活動))

これにより、オレンジ色の視覚経験は、赤経験や黄色経験を生成する神経活動の組み合わせで構成されていることが明らかである。だがこの式の右辺には具体的な経験の対象（オレンジの物  $o$  やその物の性質  $p$  など）が表れないため、客観的对象がどのように視覚経験と関わっているのかを説明できない。これは、伝統的内在説における内観の対象が心的状態であり、内観の対象に客観的对象が含まれないことと類比的である。

### 3-3-2 色に関する外在説

この立場では、色を実在する性質と考えるために、神経的処理のきっかけとなる表面反射率に訴えることができる。ただし、物の表面が同じ赤に見える表面同士でも、実際は異なる表面反射率を持つ場合があり、その場合は見えている色の区別と表面反射率の区別が必ずしも一致しない。そこで、異なる表面反射率を持つ表面同士に、何らかの共通した傾向性があると考えることができる。ピーターとタイは、個別の色とは、何らかの表面反射率を持つ表面が持っている傾向性であるとしている。

このように色が物の表面の性質であるとする説は、前節で紹介した色に関する内在主義的説明を排除しない。ピーターとタイは、色が我々と完全に切り離されて存在するとは主張しない。我々にその色がどのようなものであるか分かるのは、我々の視覚システムが構成される仕方にもよる。その意味で、我々の見ている色のあり方は人間中心的である。だが、だからと言って色は個々人の主観的な性質であるわけではなく、物の表面の持つ客観的な性質である。

さきほどのオレンジ色の例についてならば、客観説におけるオレンジ色

とは、ある特定の表面反射率を持つ表面の傾向性 (R) である赤と、別の特定の表面反射率を持つ表面の傾向性 (Y) である黄色の組み合わせである。

(式) □p (オレンジ色) → (□ (赤: 表面の傾向性 R) & □ (黄色: 表面の傾向性 Y))

この式においては、色に関する主観説における式では明らかになっていなかった客観的な対象が、物の表面の性質である R や Y として組み込まれている。このように視覚経験の対象として客観的对象を置くことは、これまで述べてきた内観内容に関する外在説の特徴と類比的に語ることができる。以上のように考えることで、色を内観する場合も、その内観内容は客観的な対象であると言える。

#### 4 結 論

内観することは、日常的には心的状態を省みる作業である。従って内観内容は主観的なイメージであると考えられている。初期の心理学における思想背景にもその考えが見られ、自らの思考内容、思考過程を観察することが内観であるとされている。これは現在の心理学についても同様であり、心理学は一般に「主観的体験」を問題にするとされている。しかし、自らの知覚経験について何らかの仕方で内観報告することは「心」を科学的に研究する際に必要な作業の一部であるにも関わらず、その内観内容が物理的な存在物ではなく、私的な性質しか持たない心的状態であるとする、内観内容を科学的方法の一部として客観的に扱うことは難しくなってしまう。

だが、初期の心理学にせよ、それを批判した行動主義にせよ、内観に関する見方が誤っていたとしたらどうだろうか。彼らはロック的な伝統における内観の見方をしており、そこから内観を支持したり、あるいは批判したりしていたが、その伝統的考えを再考する必要がある。

ドレッキのように内観内容を心的状態ではなく知覚対象とし、内観する際に我々はある仕方以外を対象を知覚していると考えれば、少なくとも知覚経験の内観の対象に関しては、公共的な物を据えることができる。これにより、心理学における内観内容も私的な性質だけを持つものではなく、実証的な比較や検討を行うことのできるデータであると主張することができるのではないだろうか<sup>15</sup>。

強調しておかなければならないが、この見方は内観が主観的な要素を持つことを否定するものではない。ただしその場合、主観的要素を持つのは内観内容ではなく内観する行為や内観が成立するための身体的過程（特に脳内過程）であり、そこで想定されている主観的要素の特徴は、内観する行為や内観が成立するための過程は「個々人それぞれが持つことを余儀なくされる」というものである。内観内容が個々人それぞれの脳過程において生成され、我々が他人の脳内過程を経験できないという事実がある限り、内観することは個々人に特有のものである。その意味で、内観することは主観的な側面を持っている。

さて、外在主義的態度を取って内観内容に注目し、内観内容が客観的な対象であると考えれば、内観における対象は個々人に特有ではなくなる。例えば「りんごを見ている」ことを内観する場合、その内観が生成される過程自体は、他の人には見えない、個々人の経験する過程であるが、内観内容である「りんご」は心の中のイメージとしてのりんごではない。誰にでも見える、心の外にある客観的な物としてのりんごである。このことはりんごの色に関しても同様である。りんごの色はりんごの表面の持つ性質に多くを負っている。りんごの色がどのように経験されるかは個々人の身体的条件にもよるが、知覚の対象や内観の対象がりんごの表面の性質であることには変わりがない。その意味で、物の色の知覚を内観する場合（「こ

<sup>15</sup> 心理学の実験において、内観内容と、そのデータとして言語や行動によって提供される内観報告は、同一の身分を持つことになる。

のりんごは赤く見える」ことを内観する場合), 内観内容に現れる色が心とは独立して存在する物の側の性質であることが主張できる。

以上のことから, 心理学における内観内容は客観的な対象であることが主張でき, 内観内容が主観的であるからデータとして適切ではないという批判を免れることができる。

### 参 考 文 献

- Boring, E. G., 'A history of introspection', *Psychological Bulletin*, 50, 169-189, 1953.
- Carruthers, P., 'Natural theories of consciousness', *European Journal of Philosophy*, 6: 2, 203-222, 1998.
- Carruthers, P., *Phenomenal Consciousness*, Cambridge University Press, 2000.
- Danziger, K., 'The history of introspection reconsidered', *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 16, 241-262, 1980.
- Dretske, F., *Naturalizing the Mind*, MIT Press, 1995.
- Dretske, F., 'The Mind's Awareness of Itself', *Philosophical Studies* 95: 103-124, 1999.
- Hardin, L., 'Reinverting the Spectrum'. In *Readings on Color*, Vol. 1, ed. A. Byrne and D. Hilbert. Cambridge, Mass.: MIT Press, Bradford Books, 1997.
- Hebb, D. O., 'What Psychology about', *American Psychologist* 29, 71-79, 1974.
- Lashley, K. S., 'The behavioristic interpretation of consciousness', *Psychological Review* 30, 237-272 & 329-353, 1923.
- Leahey, T. H., *A History of Psychology: main currents in psychological thought*, Prentice-Hall, 1980.
- Lycan, W. G., *Consciousness*, MIT Press, 1987.
- Lycan, W. G., *Consciousness and Experience*, MIT Press, 1996.
- Peter, B. and Tye, M., 'Of Colors, Kestrels, Caterpillars, and Leaves', *Journal of Philosophy*, 469-487, 2001.
- Rosenthal, David M., 'Two Concepts of Consciousness', *Philosophical Studies* 49, 1986, 329-359.
- Skinner, B. F. 『行動工学とは何か』 犬田充訳, 佑学社, 1975.
- Tye, M., *Color, Content, and Consciousness*, MIT Press, 2000.

## 心理学における内観内容の身分

- 高橋滯子『心の科学史 西洋心理学の源流と実験心理学の誕生』東北大学出版会, 1999.
- Watson, J. B. 『行動主義の心理学』安田一郎訳, 河出書房新社, 1980.
- Wundt, W., *Outlines of Psychology*. Tr. by C. H. Judd, Wilhelm Engelmann: Leipzig, 1907.
- Wundt, W., 'Lectures on Human and Animal Psychology'. Tr. from the 2nd. edition by J. E. Creighton and E. B. Titchener, Swan Sonnenschein and Co: New York, 1984: reprinted in *Series D Comparative Psychology Volume 1*, D. N. Robinson (ed.), University Publications of America: Washington D. C., 1977.
- 矢田部達郎『思考心理学史』培風館, 1948.
- 吉村浩一 '変換視研究における内観報告法', 心理学評論, Vol. 34, No. 3, 383-411, 1991.
- 吉村浩一『心のことば 心理学の言語・会話データ』培風館, 1988.